

第Ⅱ章 調 査

1 調査地の位置と既往の調査

A 調査地の位置

調査地は、藤原宮大極殿跡から南東に約600～800mを隔てた藤原宮跡の東南隅部にあたる。東方約500mには、香具山の山塊がそびえる。

調査地は、藤原宮東南隅に位置し、藤原宮の南面外郭施設と藤原宮東南官衙地区、そして藤原京左京七条二坊西北坪におよんでいる。

調査地の400m南方には、小山廃寺（通称・紀寺跡、藤原京左京八条二坊）がある。小山廃寺は、かつては、その伽藍中軸線が京の条坊とずれている、と考えられてきたが、近年の検討によって、条坊と中軸線が合致することが判明した。

また、調査地北東には、7世紀中頃の瓦を出土する木之本廃寺がある。軒瓦は吉備池廃寺と同範であり、丸瓦・平瓦にも共通するものがあるので、「高市大寺」所在地の一候補とされる遺跡である。

地形分類的に述べると、調査地の東方、香具山山麓との間には、「飛鳥面」とよばれる低位段丘面の北端部がおよんでいる。高所寺池の東岸は、この低位段丘面に隣接する自然堤防である。

飛鳥面と香具山山塊との間には、現在、「中ノ川」とよばれている河道が北流して、両者を隔てている。この中ノ川は、飛鳥船石遺跡の東麓から、現奥山集落（奥山廃寺寺域）の西方を北に流れ、大官大寺の西を迂回して香具山山塊の西裾（現在の飛鳥藤原宮跡発掘調査部庁舎東側）を北に流れてゆく。このルートは、「斉明紀」に見える「狂心渠」の一部とみて誤りなからう。

高所寺池の西岸に近接して、その西南には、現在、春日神社が鎮座する小丘陵がある。これは、飛鳥の雷丘から北北西に連続する浸食残丘の一つで、高所寺池西南部はその丘陵裾に近接する。

B 既往の調査

高所寺池周辺200m内外の範囲でおこなわれた発掘調査は12件ある。いずれも奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部による調査である。

これらを、藤原宮外郭施設、藤原宮東南官衙地区、そして藤原京左京七条二坊、の3つにわけ、概要を示す。

藤原宮外郭施設関係の調査

第13次調査は、農業用倉庫の新築工事にともない、高所寺池の西堤体の外側で実施された調査である。藤原宮期およびそれ以前の遺構は、後世の攪乱によって失われており検出できなかった。

第15次調査は、高所寺池東方約60mの地点において、藤原宮の東南隅を確認する目的で実施された学術調査である。掘立柱建物2棟、掘立柱塀4条、溝3条、土坑1基などを検出したが、宮大垣東南隅および外濠は検出できなかった。

第27—3次調査は、高所寺池東方約70mの地点でおこなわれた、家屋新築にともなう事前調査である。東面外濠とその内側の南北溝を確認したほか、7世紀後半（飛鳥Ⅳ）の井戸、12世紀代の土坑、弥生時代の土坑などを検出した。

藤原宮東南官衙地区の調査

いずれもごく小規模調査である。

第48—9次調査は、高所寺池の北方約60mの地点でおこなわれた農小屋建築にともなう事前調査である。7世紀前半の土坑1基と14世紀の南北溝1条を検出したが、藤原宮期の遺構はみつからなかった。

第66—14次調査は、高所寺池東北隅にある上げ樋改修工事にともなう事前調査である。柱穴1基を検出した。

第75—5次調査は、高所寺池のすぐ北側を走る道路下の水道管敷設替えにともない、藤原宮の東辺から西辺に至る間を調査したが、調査範囲の制約が大きく宮期の遺構は確認できなかった。

藤原京左京七条二坊の調査

今回の調査地南方では、市道飛驒木之本線の新設にともなって第74・75次調査を実施し、左京七条二坊の東南坪と西南坪の一部を発掘調査した。

第74次調査では、左京七条三坊西南坪から七条二坊東南坪にわたる調査区をもうけた。東二坊大路を検出するとともに、七条二坊東南坪においては、南北溝4条と井戸1基を確認した。掘立柱建物は3棟を検出したが、方位が振れており、藤原宮以降のものと推測された。

第75次調査では、東二坊坊間路の西側溝を検出し、さらに東南坪では井戸1基、西南坪では井戸2基と掘立柱建物1棟を確認した。

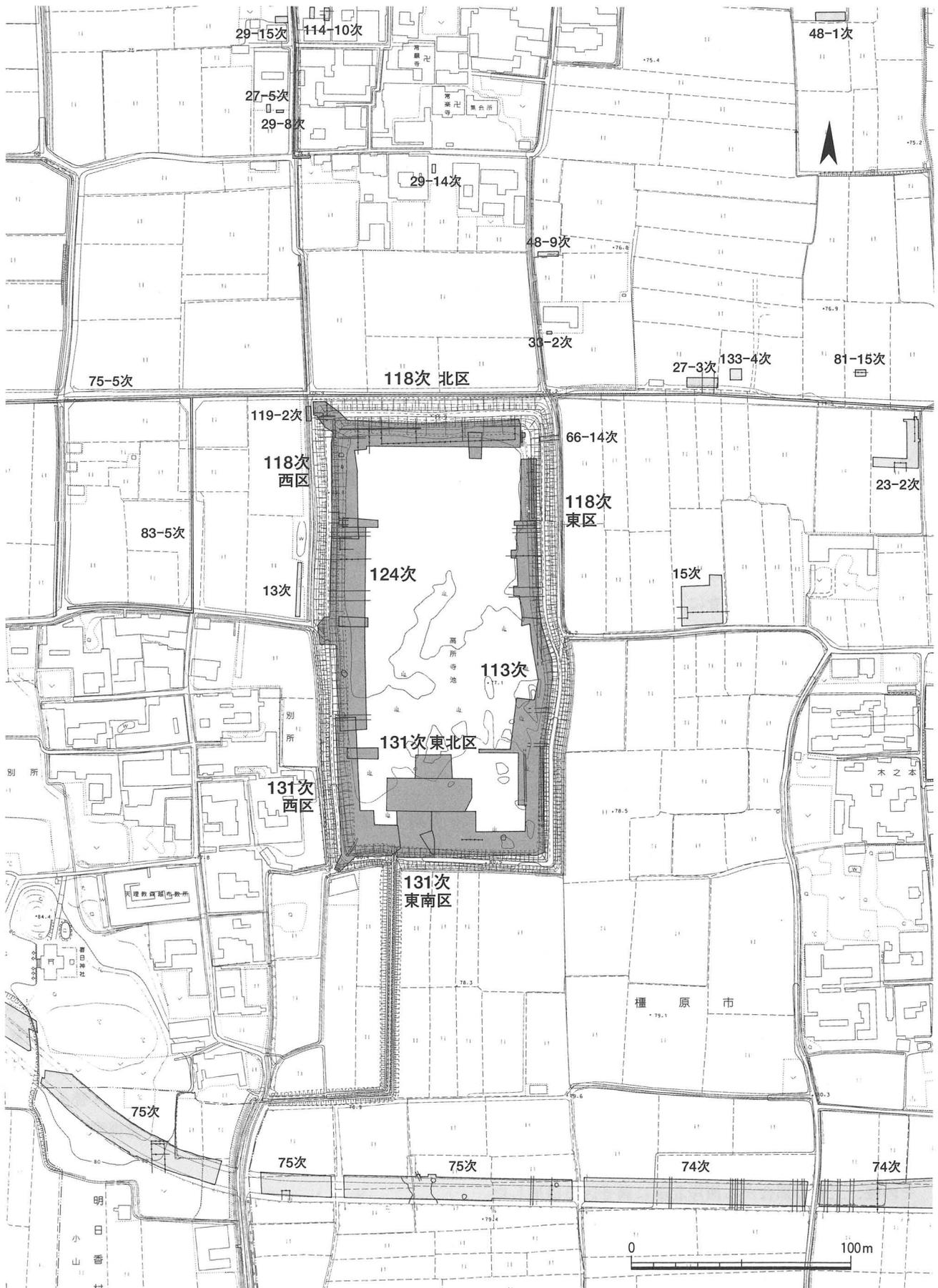


Fig. 2 調査区と周辺の調査地 1 : 2500

宮期の遺構をみると、東隣の七条三坊西南坪にくらべて建物規模や密度は小さい。しかし、七条二坊西南坪で小山廃寺同範の雷紋縁軒丸瓦1点や、同寺に関連する丸瓦・平瓦が出土しており、藤原京の宅地としてではなく、小山廃寺の寺域との関係をうかがう成果があがった。

さらに、第75次調査では、古墳時代（6世紀前半以前）の建物と堀、そして7世紀前半（飛鳥Ⅰ～Ⅱ）の建物や溝、井戸が見つかったほか、12世紀末～13世紀の居館跡が発見された。東西52.5m×南北36.5mの長方形に濠が巡り、内部には建物、井戸、土器廃棄土坑などがあつた。

このように、高所寺池周辺で過去におこなわれた調査では、藤原宮・京の時期だけでなく、その前後、弥生時代から中世に至るこの地域の歴史が、発掘調査によって明らかにされつつある。

2 調査の概要

2000年度（平成12年度、第113次調査）は、当初、工事着手が翌年（工事は、平成13年度から15年度までの3カ年計画）とのことで、まず、高所寺池の堤体内側での地下遺構残存状況を確認する調査に入った。東西の池岸で3カ所ずつ、南北の池岸で1カ所ずつの合計8カ所に幅3mの試掘坑を設定した。試掘坑は池の中にもおよぶため、試掘坑の周囲を土壤改良した後、重機掘削をおこない調査に着手した。

その後、工事計画が変更され、2000年度中に一部工事が実施されることとなったため、その範囲にあたる南と東辺南部の池岸の範囲を発掘調査することとなった。これとあわせて試掘坑の調査も実施した。

南岸を南区、東岸を東区とし、トレンチは東岸と北岸に1カ所ずつ（東・北トレンチ）、西岸に3カ所（北から西Ⅰ～西Ⅲトレンチ）とした。調査の結果、六条大路および東二坊坊間路の側溝や、7世紀の掘立柱柱建物や井戸、中世期の井戸などを検出した。調査期間は2001年1月15日～4月5日、調査面積は2080㎡。

2001年度（平成13年度、第118次調査）は、北岸を中心として、東西の岸の北部を含むコ字形の範囲、および、池の西北隅にある底樋改修工事に対応する範囲について調査に入った。

その後、工事の都合から西岸北部に調査区を追加した。この調査の過程で、底樋改修工事の範囲において大型の掘立柱柱建物（SB9600・9601）が確認された。

これを受けて遺構保全のために工事内容が変更され、それともない調査区を一部拡張した。調査の結果、藤

原宮南面の掘立柱大垣と内濠・外濠、藤原宮東南官衙地区の掘立柱建物や堀などを検出した。調査期間は2001年10月29日～2002年2月20日、調査面積は2000㎡。

また、取水口の工事にもなつて池外側の水路改良工事の事前調査も実施した（第119-2次調査）。遺構は検出しなかった。調査は2002年4月3日、面積14㎡。

2002年度（平成14年度、第124次調査）は、西岸の南部を調査して、藤原宮南面大垣と外濠のほか、7世紀代の遺構を検出した。また、洪水吐改修工事にもなつて調査区をもうけて調査した。調査期間は2002年10月24日～12月20日、調査面積は1100㎡。

2003年度（平成15年度、第131次調査）は、西岸南端と南岸の西部に調査区を設定するとともに、池内部にも調査区を設定して、これを学術調査として実施した。藤原宮期の遺構は削平を受けてみつからなかったが、古墳の周溝や中世期の井戸を検出した。調査期間は2003年10月21日～12月25日、調査面積は1960㎡。

3 測量と地区割

A 測量

測地系の変更 2002年4月1日の改正測量法の施行に伴って、測量の基準が日本独自の基準（日本測地系）から世界標準である世界測地系に変更され、以後、公共測量はこれに準拠して実施することとなった。標高に関しては、実質的に著しい変化はなく、大きな問題はない。しかし、位置の基準となる平面直角座標系の原点は、東南方向へ緯度で約12秒、経度で約10秒移動し、移動量（座標変位量）が地域ごとに異なる。これまで、公共測量に準じて設置した3級基準点などを基準に日本測地系での調査をおこなってきた当研究所であるが、それへの対応が必要になった。

そこで、発掘調査等に世界測地系を導入するまで、施行後1年間の準備期間を設けることとし、その間に既設基準点の改測（再測量）・改算（旧観測値を用いた再計算）作業を実施して、座標変位量を確定すること、過去の日本測地系の成果は、今後、世界測地系へ読み替えること、などの基本方針を決定した。そして、発掘調査は2003年

Tab. 1 2級基準点No.173の新旧成果

基準点	X座標	Y座標	標高
日本系	-166,949.961	-17,044.252	79.416
世界系	-166,603.438	-17,305.828	79.416
差	+346.523	-261.576	

4月から世界測地系へ全面的に移行した。本報告の対象地では、調査の最終年度の第131次調査のみが世界測地系での調査にあたる。

当該地域では日本測地系の座標値を世界測地系に変換するためには、実用上、X座標で+346.5m、Y座標で-261.6mを加えればよいという結果を得ており、本調査に用いた基準点No.173の新旧成果とも合致する (Tab.1)。

B 地区割

概要 奈文研では飛鳥藤原地区の発掘調査において平面直角座標第Ⅵ系に基づく地区割をおこなっていた。

この地区割りは小地区・中地区・大地区からなる。小地区は一辺3mの正方形で、それぞれX座標値・Y座標値ともに3の倍数からなるグリッドで構成される。

次に中地区は、原則として、東西222~228m (小地区74~76区画分) ×南北54m (小地区18区画分) の区画である。中地区南辺をAライン、北へ3mごとにB、C、D…とし、東辺を10ライン、西へ3mごとに11、12、13…とする。すなわち、中地区東南隅を起点A10とし、小地区東南隅のアルファベット1文字と2桁の数字の組合せで表すグリッド名称を小地区名とする。その小地区名の前に中地区を表すアルファベット1文字を冠する。

大地区は東西672m (中地区東西3列分)、南北324m (中地区南北6列分) からなる。大地区名は先頭から時代を表す数字 (飛鳥時代は5)、遺跡の種類を表すアルファベット (都城はA、寺院はBなど)、位置または遺跡名 (飛鳥寺はAS、豊浦寺はTUなど) を示すアルファベット

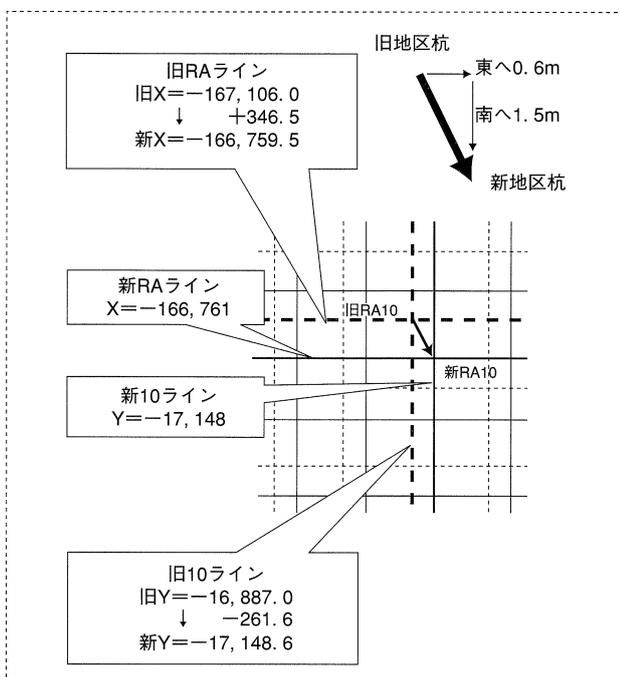


Fig. 3 新旧地区杭の位置関係

Tab. 2 航空写真撮影一覧

調査次数	撮影年月日	フィルム種別	図化に用いられた垂直写真
第113次	2001.2.21	カラー	4コース31カット
第118次	2001.11.27	カラー	3コース10カット
第118次	2002.1.29	カラー	3コース15カット
第124次	2002.12.13	カラー	1コース8カット

2文字の組合せからなる。

前述のように、世界測地系への移行に伴う座標変位量は3の整数倍とは一致しないため、それぞれの座標系に基づく方眼は、新旧2つの地区割でずれを生じることになった。飛鳥藤原地域でのずれの大きさは、

$$X \text{座標が、} +346.5 - (3 \times 115) = +1.5\text{m、}$$

$$Y \text{座標は、} -261.6 - (3 \times 87) = -0.6\text{m、}$$

であるため、日本測地系に基づく旧地区杭の南東 (南へ1.5m、東へ0.6m) に、世界測地系に基づく同名の地区杭が設定されることとなった (Fig.3・4)。

基準点測量と実測 本報告に関わる発掘調査で使用した基準点の概要を以下に記す。

調査対象地の高所寺池北西隅の堤上には、第66-14次調査では、当調査部が設置した基準点No.8があり、基準点No.1を後視、調査地脇の新設点を前視とした開放トラバースを行い、これを基準点としている。

また、調査対象地の高所寺池の北堤上には、当調査部が設置した2級基準点No.173がある。

第113・118・119-2・124次の各調査では、この基準点を既知局とし、観測点となる移動局の座標をリアルタイムで得られるRTK-GPS法で、小地区の地区杭や遺構面に実測の基準となる座標値をもつ基準線を設定し、実測の基準としている。

第131次調査では、調査区を囲む3個所の2級基準点を既知点とし、GPS短縮ステティック法により調査区隣接地に2個所の基準点を新たに設け、その点を用いてトータルステーションで基準線を設定し、小地区の地区杭や実測の基準とした。

実測図の縮尺はいずれも1/20で、平面図作成後、標高を記入した。標高は、水準点から標高をとりつけている基準点No.8・No.173の標高を基準としている。

航空写真測量と編集図 調査時には標定点を写し込んだ航空写真測量も実施しており、各調査区ともこれを図化して遺構平面図とした。各次数ごとにおこなった図化図面を実測図により校正し、それらを接合した編集図を作成した。本報告の平面座標は世界測地系で表示し、日本測地系の数値は一部を示すにとどめた。

Tab. 3 地区割の起点の座標値一覧

日本測地系

大地区	中小地区	X座標	Y座標	大地区	中小地区	X座標	Y座標
5AJG	FA10	-166,944	-17,115	5AJC	UA10	-166,944	-16,887
5AJH	AA10	-166,998	-17,115	5AJD	PA10	-166,998	-16,887
5AJH	BA10	-167,052	-17,115	5AJD	QA10	-167,052	-16,887
5AJH	CA10	-167,106	-17,115	5AJD	RA10	-167,106	-16,887
5AJH	DA10	-167,160	-17,115	5AJD	SA10	-167,160	-16,887
5AJH	EA10	-167,214	-17,115	5AJD	TA10	-167,214	-16,887

世界測地系

大地区	中小地区	X座標	Y座標	大地区	中小地区	X座標	Y座標
5AJG	FA10	-166,599	-17,376	5AJC	UA10	-166,599	-17,148
5AJH	AA10	-166,653	-17,376	5AJD	PA10	-166,653	-17,148
5AJH	BA10	-167,707	-17,376	5AJD	QA10	-167,707	-17,148
5AJH	CA10	-166,761	-17,376	5AJD	RA10	-166,761	-17,148
5AJH	DA10	-166,815	-17,376	5AJD	SA10	-166,815	-17,148
5AJH	EA10	-166,869	-17,376	5AJD	TA10	-166,869	-17,148



Fig. 4 高所寺池調査地とその周辺の地区割 1:3000
(括弧書は日本測地系)